



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2002.10 第9号



提◆言

SPF豚農場認定基準の見直しについて

SPF豚農場認定基準再検討委員会委員長 柏崎 守
農林漁業金融公庫技術参与

SPF養豚の目的は、疾病リスクを最小限に押さえる生産システムにより生産の効率化や豚肉の高品質化を図ることにあります。SPF養豚は安定生産が図れることから、農場数は年々着実に増加しており、消費者の関心はますます高まっています。SPF豚生産者の経営安定と消費者の「安全・安心」への信頼向上をより確実なものとするため、日本SPF豚協会は1994年「SPF豚農場認定制度」を発足させ今日に至っています。

SPF豚農場認定制度は、生産システムを正常に稼働させるための基準を示し、それに沿って生産が行われている農場であれば認定される仕組みです。認定農場は、独自ブランドで安心・安全なSPF豚肉として売ることができます。認定期間は1年限りで、基準を逸脱すればただちに認定取り消しとなります。

認定農場数は、2002年3月現在で160農場に達しており、飼養母豚頭数は約5万9,000頭で、国内頭数シェアで6.4%を占めるに至っています。しかし、認定の申請は任意であり、認定農場は各生産ピラミッド傘下農場の35%にとどまっています。

認定に要する経費は生産者の負担ですが、その目的や意義について理解してもらい、さらに多数の農場に認定事業に参加してもらう必要があります。また、流通・消費段階におけるSPF豚肉の認知度をさらに高め、有利販売や販路拡大に積極的に取り組む必要が望まれています。

SPF豚農場認定制度が発足して10年近くになります。その間にも家畜生産を巡って、O-157やサルモネラなどによる畜産食品の汚染事故が相次いで起り、生産段階における安全性確保に対する要請は一段と増大しました。さらに、消費者の安全・健康志向の意識が高まり、給与飼料や投与薬剤、発生疾病など飼育プロセスにおける情報開示まで求められる時代へと変化しています。認定制度は、こうした要請にいち早く応えてきましたが、ここに来て生産基準や評価法について改めて検証する必要がでてきております。実際に生産ベンチマークやヘルスチェックにおける測定・診断・記録方法、成績の評価基準などについて一部で実状にそぐわない事項がみられます。さらに、生産プロセスについての情報公開のあり方についても明確にしておく必要があり、またJAS規格との整合性を図る必要性もでてきています。

認定基準はいつの時代にあっても、社会の要請や技術の進歩に鈍感であってはならず、かつ合理的である必要があります。こうした背景から、日本SPF豚協会は現行の認定基準の見直しを行うことを決定し、本年8月「SPF豚農場認定基準再検討委員会」を発足させました。委員会での検討結果は来年2月までにとりまとめ、理事会の承認が得られれば、新基準による認定を6月から逐次実施し、12月から完全実施を目指すとしています。基準見直しについてのご意見をどしどしお寄せ下さい。

SPF
養豚の
はじまり
①

【代用乳の配合ミス】 あるとき、極めて順調に発育していたPrimary SPF豚が体重30~40kgに達すると、前脚が前方にくの字に曲がり、その結果つま先立ちで歩く奇病がほとんどの豚にみられるようになった。はじめはその原因が何であるか全く判らず、飼育担当者は夜も眠れないほど悩まされていたが、栄養学の文献にこのような症状はくる病の典型であり、ビタミンD₃が不足しても過剰であっても同じ症状が現れるとの記述を偶然見つけた。そこで代用乳の製造記録を調べたところ、ビタミンD₃の希釈倍率を勘違いして、標準の10倍以上も誤って添加していたことが判明した。これを是正した後は同じトラブルが発生することはなかった。それにしても、哺乳期に過剰摂取したビタミンD₃の影響が体重が30kgを超えてから現れるとは新鮮な驚きでもあった。

● 「国産SPFポークセミナー」のご案内 ●

牛乳による食中毒事件に端を発し、BSE問題や産地詐称、偽表示事件など、畜産関連業界の一連の不祥事は、一般消費者の信頼を大きく裏切る事態を招いてしまいました。しかしながら、大多数の真面目な関係者は、より安全で美味しい畜産物を食卓に届けるべく日夜努力していることも事実です。日本SPF豚協会は、会員と共に過去30有余年にわたり、豚の健康維持とそれともなう高品質の豚肉生産をモットーに、「安全と美味しさを求めて」努力を重ねてまいりました。

畜産物に対する信頼が揺らいでいる今こそ、私共SPF豚生産者の熱い思いを一人でも多くの消費者に伝え、SPF豚肉に対する理解を深めてもらおうと、今回のセミナーを企画致しました（次ページのプログラムをご参照ください）。

従来のセミナーは、SPF豚生産者および関係者の生産技術向上と研鑽に主眼を置き、消費者にそのことをより知ってもらおうというのが目的でした。今回はさらに一歩進めて、生産者と消費者が一緒になって生産と流通を考え、SPF豚生産者が苦勞して生産した豚肉をどのようにして正しく食卓に届けるかを一緒に考える糸口にしたいと思っております。一人でも多くの生産者、消費者のご参加を期待しております。

第一部ではまず、豚肉の安心システムをとりあげ、高橋吉男氏（日本SPF豚協会副会長）に豚肉生産の場において日本SPF豚協会が果たすべき役割と、現在の活動状況について説明してもらいます。次に、SPF豚生産から食卓までの安全性の確保、つまりトレーサビリティと安心システムについて原 耕造氏（全農大消費地販売推進部）の講演をお願いしました。次にSPF養豚方式で育てられた豚肉はなぜ美味しいのか、美味しい豚肉とはどういうものかについて中井裕氏（東北大学大学院 農学研究科 教授）に解説をしていただきます。

休憩の後、第二部としてパネルディスカッションを行います。パネラーは、日頃から自分で自信を持って

生産した豚肉を確実に消費者に届けるために苦勞し、奮闘しておられる廣田則史氏、小田島健夫氏、豊下勝彦氏、平芳弘氏にお願いし、諸々の試み、喜びや悩み等について話題提供をいただき、いろいろな角度から議論を進めてみたいと思っております。

今回のセミナーは、我々生産者と消費者との絆を強固にし、より良いコミュニケーションを築くために、一般消費者にも参加を呼びかけることにしました。これは、会場となるJAホールが比較的広く、客席数が約400席あるために可能になりました。これを機会に生産者と消費者の対話の輪が広がることを願っています。

セミナー終了後、会員の連帯を強め、さらに会員と消費者が一堂に会して歓談することによって、相互理解を深めることをめざして懇親会（レセプション）を開催することにしました。

SPF豚肉を使用した手作りのハム・ソーセージ類をはじめ、しゃぶしゃぶなど、豊富な料理を準備し、飲物もたっぷり準備しました。加工品は、北海道の(有)アグロ（日浅文男社長）から骨付きハムの提供を頂くほか、(株)ユキザワ（藤田世秀社長）の雪沢農場（秋田県大館市）において、今回の加工を目的に飼育した豚（LWD雌）をSPF豚専用カット工場（伊藤忠飼料直営・宮城県古川市）で処理し、(株)ぐんらく（群馬県、三日市達夫社長）で手作り加工したハム・ソーセージ類です。また、しゃぶしゃぶは(有)ケイアイファウム（小田島健夫社長）のご協力によるものです。参加費は①セミナー3,000円、②懇親会（レセプション）5,000円です。

参加ご希望の方は**同封の参加申込書により、10月20日までに郵送もしくはFAXにてお申込み下さい**。多くの方々のご参加をお待ちしております。

なお、セミナー、懇親会（レセプション）共、定員に達し次第締め切らせていただきますので、お早めに申込み下さい。（日本SPF豚協会会長 赤池洋二）

国産SPFポークセミナー —安心と美味しさを求めて—

大会委員長 大塚 国彦
(長野県農協直販株SPF種豚センター長)
実行委員長 中村 君義 (全農畜産生産部)

開催日 平成14年11月8日(金) 13:00~17:00
開催場所 JAホール
(千代田区大手町 JAビル9F)
(別紙申込書の地図参照)

会費 3,000円

セミナープログラム (敬称略)

開会のあいさつ 13:00~13:10

赤池 洋二 (日本SPF豚協会会長)
大塚 国彦 (大会委員長)

[第一部] 講演

座長 吉田 修作 (全農畜産総合対策部)

I. 豚肉の安心システム

①豚肉の生産と日本SPF豚協会の役割 13:10~13:40
高橋 吉男 (日本SPF豚協会副会長)

②農場から食卓まで(トレーサビリティ) 13:40~14:30
原 耕造 (全農大消費地販売推進部)

II. 風味の良い豚肉をつくる 14:30~15:00
中井 裕 (東北大学大学院農学研究科教授)

[第二部] パネルディスカッション 15:15~17:00

座長 赤池 洋二 (日本SPF豚協会会長)

テーマ: 「生産者からのメッセージ」
—美味しい豚肉を食卓に届けるために—

パネラー

廣田 則史 ((有)中多寄農場代表取締役)
小田島健夫 ((有)ケイアイファウム代表取締役)
豊下 勝彦 ((有)ポークランド代表取締役)
平 芳弘 (芳寿牧場代表取締役)

懇親会 (レセプション)

セミナー終了後、懇親会(レセプション)を開催します。SPF豚肉のしゃぶしゃぶや加工品を盛りだくさんご用意します。SPF豚肉のおいしさをご堪能ください。

開催時間 17:30~19:30

開催場所 JAレストラン (JAビル9F)

会費 5,000円

お申込み・お問い合わせ先

日本SPF豚協会

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6
産広美ビル7F

TEL 03-5283-5021

FAX 03-5283-5022

●認定基準再検討委員会がスタート

冒頭の「提言」にもある通り、当協会のSPF豚農場認定基準の見直しと強化を図ることを目的とした認定基準再検討委員会が発足、去る8月5日に第1回目の会議が行われました。

この日は委員会の構成と役割分担等を協議、「生産成績評価部会」と「ヘルスチェック部会」とに分かれてそれぞれ検討を重ね、2、3か月ごとに全体会議を開催することとなりました。

委員長には柏崎守当協会理事(農林漁業金融公庫技術参与)が選出されました。また、学識経験者として山本孝史氏(日本SPF豚研究会会長)、祐森誠司氏(東京農業大学助教授)に、顧問として波岡茂郎当協会認定委員会委員長に、それぞれ参加をお願いすることとなりました。

9月30日には第2回目の部会ごとの協議と全体会議を開催。次回は12月4日に開催されます。今後検討を重ね、来年2月をめどに改正案をまとめる予定です。

サルモネラ症

全農家畜衛生研究所 浅井 鉄夫

サルモネラの血清型は、2,000種以上と非常に多く、その内のいくつかの血清型が、家畜伝染病予防法で監視伝染病に指定されています。

豚でしばしば問題となるのは、サルモネラ・コレラシイス(SC)とサルモネラ・ティフィムリウム(ST)で、発生した場合には敗血症や腸炎などが引き起こされ生産性に大きな影響を与えることが知られています。

一方、サルモネラは、腸内細菌叢の一部のように定着している場合もあり、常に臨床症状を示すとは限りません。

肺炎や敗血症で分離されるサルモネラは、主にSCですが、まれにSTも分離されています。発熱、食欲不振、発咳が認められ、チアノーゼを呈し死亡する豚もみられます。

SCによるサルモネラ症は、以前は比較的日齢の進んだ豚でみられましたが、1990年代に入り、若齢豚においてPRRSウイルスなどとの混合感染による高い死亡率の症例が各地で報告されています。このような場合には、いわゆる“PRDC”と呼ばれる混合感染症により、臨床症状が複雑であるため、症状だけで判断できない場合もあります。

サルモネラによる腸炎では、STが頻繁に分離されますが、その他の血清型も分離されます。若齢豚では黄色味がかかった水様性の下痢便です。肥育豚では、しばしば、血便をする豚もいるため、豚赤痢、増殖性腸炎、豚鞭虫症との区別が必要です。サルモネラによる場合、これらに比べて、血便の頻度は少なく、血便の排泄は短期間です。肥育豚で下痢をとまなう急死が見られたら、サルモネラ症を疑う必要があります。

一般的にサルモネラ症の診断は、下痢や軟便がみられる豚では糞便から、敗血症や肺炎を発病した豚では主要臓器からのサルモネラ菌分離によって行われます。

また、農場でのサルモネラ汚染状況の調査には、糞便などからの細菌検査が行われますが、感染豚(保菌豚)から恒常的に排泄されているとは限らないため、欧米では複数のサルモネラの毒素(LPS)を利用した抗体検査が、モニタリング手段の一つとして行われています。

サルモネラの防除対策は、外部からの侵入防止、汚染状況の調査(汚染地図の作製)、洗浄・消毒、有効抗生物質や生菌剤の投与、早期治療などが中心となります。牛や鶏用のサルモネラワクチンが国内で市販され、鶏においては、競合排除(CE)法を応用した資材も市販されていますが、豚ではこれらの商品は発売されていません。

サルモネラは、糞などの汚物の中で長期間(数か月)生き続けるということが知られています。農場への病原体の持ち込みや農場内での感染拡大を防止する上で、豚房、器具機材、車両の消毒、着衣の着替え、長靴の消毒など、十分な注意が必要です。

また、サルモネラは、各種動物にも広く分布していることから、野生動物(ハト、カラス、ネズミなど)の侵入防止や駆除の徹底は、防疫対策をする上で重要となります。

サルモネラに対する薬剤の有効性は、農場ごとにはばらつきがあるため、農場を汚染しているサルモネラを分離し、薬剤感受性試験を実施する必要があります。近年、薬剤耐性菌の問題は、投薬効果のみならず公衆衛生上も注目されています。薬剤の選択・使用にあたっては、管理獣医師と相談して下さい。

サルモネラによる食中毒が注目されるなか、養豚生産現場におけるサルモネラ汚染について、「生産性への影響」のみならず「生産物の安全性」の面からも重要となっています。

代用乳の威力

伊藤忠飼料(株)研究所 鈴木 保



哺乳子豚への補助としての代用乳

母乳が出ない！

母豚が母乳を出さないことは時々あります。原因は母豚の発熱、過食、貧食、子宮内膜炎などいろいろありますがそんな時子豚にはどのような処理をされていますか？一般的には里子して哺乳子豚の数を減らすか、早く餌付けして早期離乳するかでしょう。手遅れになると、子豚は下痢がひどくなり簡単に衰弱死してしまいます。逆に下痢していることで母乳が出ていないことに気付くこともあります。母乳を出すようにするのがベストですが、なかなかそうは簡単にいきません。そこでやはり子豚の救済処置を早期にとる必要があります。意外と知られていないものに豚代用乳があります。結構歴史はあるのですが、使用する機会がごくわずかなため経験者も少ないのが現実でしょう。今回はその「代用乳」の隠れた力をご紹介します。

代用乳と人工乳の違い

子牛では当然のように代用乳を用います。それは哺乳乳を早期に打ちきって販売用の「牛乳」を得るためでもあります。全然足りない母乳を補うものとしてごく一般的に利用されています。

代用乳は4～5倍のお湯で溶かして与えますから原料は水に溶け易い物でなければなりません。また高エネルギーを確保する為、油脂の添加も多いのが特徴です。そのため人工乳よりも乳化剤や加工技術が重要になります。当然価格も高くなりますが1頭当たりの使用量が少ないため、経済的負担は小さいのです。また、お湯で希釈することもあり、代用乳は餌付け用と比較して栄養価が高く設定されています。

初乳はやはり必要

代用乳を使うケースは一般に2通りあります。母豚が事故で死亡したりして、全く母乳がない場合と母豚があまり母乳を出さないか、哺乳子豚数が多すぎる場

合です。いずれの場合も初乳を飲ませることは必須です。分娩直後に母豚が死亡した時は、最低でも初乳を他の母豚から分割授乳する必要があります。代用乳には初乳に似た成分が含まれる物もありますが、不十分であることには変わりありません。何にしても最低1日は初乳は必要です。

代用乳の使い方

初乳を1～2日飲ませれば、代用乳だけで育てることは充分可能です。その際重要なのは、与える回数なるべく多くすることです。大きな容器に大量に入れると、細菌汚染も進み飲む意欲が削がれます。子豚が10頭程度であれば、1回2リットルぐらいが適正でしょう。また1頭ずつ分けて与えるより、群で競争させる方が勢いもあり学習もするのでより効果的です。代用乳の温度は、溶かした時点で40℃ぐらいがベストです。容器を置く位置はなるべく涼しく排糞しない場所が良いでしょう。母豚が付いている場合は決して母豚に容器を近づけないように注意しましょう。

代用乳の力

今までの我々の試験では、2～5日齢で離乳して代用乳のみで育てたところ2～3週齢までの増体が1日200～250gと自然哺育と同等もしくはむしろ良い結果が得られています。また母乳と併用している700頭一貫農場では、100%に近い哺乳育成率を達成しています。

使用上の注意点

母乳同様液体ですから長期に使用すると、子豚の消化器官の発達を妨げます。3週齢以前に粉餌（代用乳を粉のままもしくは餌付け用飼料）に切り替える努力が必要です。代用乳を入れた後、同容器に粉餌を少しずつ足せば意外と餌付きが早いものです。子豚の発育での勝負はいかに人工乳を早く食い付き、食い込ませるかです。



最近、思う事

(有)山西牧場 倉持 幸子

テレビや新聞紙上で、畜産関係のニュースが多く取り上げられていますが、その内容に私は驚くばかりです。BSEに関することはここ数年問題視されてきましたが、生産者にとって大変深刻な問題だと感じます。今は流通経路に関しての偽装事件がエスカレートし、消費者生産者双方に不安を与えています。このような事件は、食生活に大きなダメージを与えるとともに、私たちが正確な知識を得ることがいかに大切かということを感じさせてくれました。

私たち生産者は常に責任を持ち、よりよい商品をつくるため、日々努力しています。思わぬ病気等で一変してしまうようなこともあります。それでも改善・努力を重ね、安心な農畜産物を送り出せるよう心がけているのです。

今は「顔の見える販売」ということで、生産地・生産者が明確でなおかつ安心できるような商品が求められていると思います。つくる側、求める側が本当の知識を得、正しい判断をすることが必要な時にきていると思います。

私のところもSPF農場を営むかたわら、ポニーなどを飼い、その一角にバーベキューハウスを建て、近隣の方々に予約で自社の推薦するSPF豚肉の焼肉、しゃぶしゃぶなどを味わってもらっています。SPF豚のおいしさを知っていただけたらと思っています。

また、私の地域には後継者の会もあります。会の名は「6月の風」、何とも清々しい名前です。これからの畜産を担う若手のメンバーで、20代、30代の人たちです。月に1度程度会合を開き、薬品の勉強会を行ったり、仕事の状況等を皆で話し合い切磋琢磨して向上を図っています。その後には懇親会も開き、さらに親睦を重ねています。仕事としては地味なイメージがありますが、「6月の風」の人たちには活気があり、自らの仕事に自信を持っています。見ていてとても素晴らしい会であると感じ、これからも主要養豚県を中心として成果を出してくれればと、とても嬉しい気持ちになります。

私の農場からも14年間勤務し家族同様にしていた人がメンバーの一員として活躍していましたが、今年に入り病気のため34歳で亡くなりました。とても残念ですが「6月の風」でたくさんのことを学んでくれたことと思います。

はっとして、「我が家の後継者は…」と振り向くと、何と小学生が楽しそうにテレビゲームに夢中でした。



豚のことをもっと知って最高の「趣味」に—

(有)佐々木農場 佐々木 佳代

豚とは縁のない私が、縁あって養豚農家に嫁いできました。地位や名誉、肩書が氾濫するサラリーマン社会が大嫌いな私にとって、農家の嫁になることは、そういうこととは無縁の環境に入れる近道のはずでした。

ところが、嫁いだ先では、養豚一筋で黄綬褒章を受章したお父さんの存在が大きく、また我が家が全国初のSPFモデル養豚場だったため、官公庁の方々のおつきあいも多く、「大変な家に来てしまった」という

のが当時の正直な感想でした。

でも、同じ一生を過ごすなら楽しく過ごそうと思い、生まれたのが「仕事をすべて趣味にしておこう」という発想でした。

豚舎の仕事も子育ても、その他雑用も全部私の「趣味」です。ふざけていると思われがちですが、そう思えるようになってから、肩に力が入らず、自分で満足・納得した毎日を過ごしています。

お嫁に来た当時、お父さんは畜産学科を卒業した私を大歓迎してくれました。とてもありがたい話ですが、だからといって豚1頭飼えるわけではなく、毎日の新しい発見がいい勉強です。

豚舎デビューして2年、もっと豚のことを知って最高の「趣味」にしたいと思っています。



都会の野鳥 (City Bird?)

(株)ユキザワ 代表取締役 藤田 世秀

朝6時、スズメの鳴き声を聞きながら、朝陽を浴びて、まだ眠たそうな街並みを歩く。

時折、カラスの鳴き声がきこえてくる。

ほんの3カ月前までは、川内川(一級河川、鹿児島県薩摩郡宮之城町)沿いの田んぼ道を歩いていた。まだ、ラブコールに成功していないカエルの鳴き声を聞きながら。

約2年の間に、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アオサギ、ゴイサギ、アマサギ、クサシギ、カイツブリ、カワウ、バン、オオバン、カワセミ、ヤマセミ、マガモ、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ホシハジロ、マナヅル、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ホオジロ、シジュウカラ、ジョウビタキ、ヤマガラ、ヒヨドリ、エナガ、ツグミ、メジロ、モズ、ヒバリ、カワラヒワ、タゲリ、ムクドリ、シロハラ、キジバト、トビ、ツバメ、キジ、コジュケイ、ウグイス(声だけ)、コノハズク(声だけ)等を見ることが出来た。彼らは、私がじっと見ようとすると、素早く逃げ去った。気付かれぬようにそーっと近づいても、20mも近づけない。食物連鎖の下位に位置する者の、身を守

る術なのだろう。

私は街並みを抜けて、大粕川(千葉県市川市の一級河川)沿いに歩く。川とは名ばかりのどぶ川だ。流れてはいるが、ところどころでメタンが、あぶくを作っている。生き物は居そうにない。なんだか、寂しくて、ワクワクしない散歩だなあ。アレ、何か動いたぞ!

なんだ!あの形、カメの様だったけど?よく生きているなあ。もともとこの川に住んで居るのだろうか?それともペットが野生化したのだろうか?とにかく生き物が居る。それにしても汚い川だなあ。何を食べているのだろうか。本当によく生きているなあ。アレレ、あんな所にカルガモがいる。エエッ!20羽以上いる。それも悠然と???

この環境を受け止めるしかない彼らを、健気であるが、もの悲しく感じるのは私だけなのだろうか。

市川に来て、今までに見た鳥は、スズメ、ハシブトガラス、キジバト、オナガ、カルガモ、クサシギ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツバメ……もう浮かばない。何だか情けないなあ。これも人間の傲慢ゆえ、致しかたなしか?

しかし、この落差は何だろう。共生は可能なのか?私たちは何をするのか?

あと20か月でどれだけの鳥を見ることが出来るだろうか?

●認定情報●

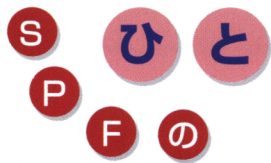
●平成14年度認定農場

[9月認定](有効期間:平成14年9月12日から15年9月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション、(有)山中畜産、ササキSPFファーム、寒河江農場、浅野農場、青森県・カワケンSPFファーム、岩手県・全農東日本原種豚農場、全農岩手県本部種豚センター矢巾分場(肥育)、(有)ケイアイファーム北上農場、秋田県・全農秋田県本部SPF種豚センター、(資)深沢スワインファーム、宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、福島県・(株)シムコ浪江事業所第二農場、(株)シムコ浪江事業所第一農場(肥育)、茨城県・常陽発酵農法牧場(株)、東京養豚農業協同組合岩井牧場、小沼養豚場、(有)米川養豚場、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、群馬県・(有)小黒養豚、(有)ほそや、(有)畑中畜産、長野県・長野県農協直販(株)伊那SPF種豚センター、(有)岩

垂原エス・ピーエフ農場、(有)SPF創成自農舎タローファーム、(農)エスピーエフこがねや第一農場、(有)クリーンポーク豊丘、新潟県・(有)ピー・ふあーむ、千葉県・(有)東海ファーム、埼玉県・(有)松村牧場、神奈川県・(有)横山養豚、静岡県・(株)マルス農場、愛媛県・県農えひめ広見種豚増殖センター、香川県・(株)七星食品多和ファーム、長崎県・第三セクター職業訓練法人長崎能力開発センター、熊本県・(有)高森農場、(有)ニッポンフィード牧場木庭農場、宮崎県・(株)九州ノーサンファームえびの種豚場、(農)守山畜産、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、長野養豚、(有)ニッポンフィード牧場上別府農場(繁殖)、(株)九州ノーサンファーム大口農場
(以上44農場)

※次回認定委員会は平成14年12月5日(木)の予定



ササキSPFファーム
佐々木 春男さん
●北海道芽室町

常に消費者を意識、スタイル貫く 北海道SPF養豚のパイオニア

ササキSPFファームは、平成4年、新築豚舎と一部牛舎を改造して設立されました。北海道東部、日本有数の畑作地帯である十勝平野の芽室町、また十勝は北海道一の酪農地帯でもあります。その中で、養豚は畑地への堆肥還元を目的としたいわゆる複合農家養豚としてバラバラと存在、その戸数は減少の道を辿っていました。「限りある畑で、今のままでは…と考えていました。そこで（SPFという）新しい養豚と聞いてやってみようと思いました。それがきっかけです」と佐々木春男さん（56歳）。「これからの養豚は多頭飼育の専業でなければ生き残れないといわれ、農協ともいろいろ話し合いました」。しかし、佐々木さんは都市型養豚にはない、畑作地帯の十勝だからこそできる養豚のスタイルがあるはずと、SPF養豚と畑作兼業の循環型養豚を貫きました。堆肥を還元できる農地があるとはいえ、35℃を超える暑い夏、マイナス20℃を下回る厳寒な冬という、恵まれた環境とは決していえない十勝での養豚。「正直、始めた当初は軽い気持ちだったかもしれないが、やってみると関係機関も含めて手探り状態で取り組まなければならなかった。でもその中



佐々木春男さんと奥さんの典子さん

で技術が出来上がっていったと感じています」と、今年で10周年を迎える北海道SPF豚のパイオニア（開拓者）ならではの言葉。「農業とは人の口に入るものを生産すること。だから責任が重く、作りっぱなしという感覚ではいけない」と佐々木さん。高い、安いだけの問題ではなく、食料生産に対する使命感なのでしょう。

だからこそ自分の生産した肉が気になり、一消費者のふりをしてスーパーやレストランなどを訪れ、売れ行きや評価を聞いて回ったりします。ササキSPFファームの豚肉は、多数の市町村の学校給食やレストランでひっぱりだこ、販売に困ることはありませんが、北海道のテーブルミートといえば豚肉、十勝の中心都市・帯広市は「豚丼」でも有名です。だからこそ気が抜けない。「豚肉も農産物も常に消費者を意識して生産しています。その意識の一部でも理解して買ってくれる人がいることは喜びであり、それを裏切らず生産し続けることが私のポリシー」と佐々木さんはいいます。

家族は、85歳を超えるご両親と、SPF変換に共に取り組みこの10年を一緒に歩いてきた妻の典子さん、そして本州で養豚業を学び父のポリシーを受け継ぐ一人息子の啓隆さんです。この家族が一同となって今までやってこれたことが何よりの幸せという佐々木さん。「ヒロ（啓隆さん）やこれから出てくる若い人達のために、旧態依然の養豚ではなく、より消費者とともに歩むスタイルを常に考えてゆくべき」と未だパイオニアの熱は冷めず、歩み続けます。

（ホクレン帯広支所畜産生産課 後藤雅司）

編 集 後 記
豚舎の夏場対策に頭を悩ませていたと思ったら、中秋の名月も過ぎ、すっかり秋も深まってきました。ほんとうに季節の移り変わりは早いものです。ところで、昨今の食肉業界の不祥事、それぞれの立場によって見方は違ってくるところですが、いずれにしてもよいことではないのです。生産者といえども、同時に消費者でもあります。その立場で生産・販売に日夜がんばりましょう。来る11月8日、「国産SPFポークセミナー」が開催されます。業界の方はもちろん、消費者の方々にもぜひご参加いただき、懇親会などで活発に意見交換をされてはいかがでしょうか。（輝）

日本SPF豚協会だより

第9号 2002年10月1日発行（季刊）
発行 日本SPF豚協会
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6
TEL.03-5283-5021 FAX.03-5283-5022
発行人 赤池 洋二
編集人 林 哲